悪霊　第六部・貧民窟の聖女（マリア）

【登場人物】

伊集院満枝……北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……満枝とはI高等女学校の一年後輩。夫を上海で亡くす。
猪俣佐和子……党員。党の名前は井上。伊集院満枝の元クラスメイト
李麗姫……元女性抗日パルチザン。満枝の仲間になる
佳代……貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
金沢文子……安藤の養女
海老沼千恵子……家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
篠原ヨシ……伊集院家の使用人
小沼健吾……元伊集院家の小作人。
安西健吉……小百合の兄
安西信子……小百合の母
増田喬……小百合の夫。川奈産業社員。上海で事故死
磯田アヤノ……小百合の叔母。華道の師範
磯田幸吉……小百合の叔母の夫。高等小学校教師
磯田悦子……東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる
老人……右翼の大物
黒木……小沼と同じ国家主義団体のメンバー
大橋多喜蔵……プロレタリア作家。党員。佳代と同居する。

三沢……党中央委員。特高警察のスパイ
手塚……「党」の戦闘的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
安藤浄海……元左翼の弁護士貧民街の僧
朴正烈……朝鮮人青年
曽根……党員

【時・場所】

昭和七年（一九三二）五月～八月。北海道H市、青森県弘前市、東京市、熱海

Ⅳ

市ヶ谷台と呼ばれる丘の上に、白いコンクリート造り、中央の尖塔の左右に翼のように張り出した四階建ての建物が聳えていた。新築された陸軍参謀本部である。

その丘の麓には、軒の低い崩れそうな平屋がびっしりと立ち並ぶ中、迷路のように入り組んだ細い路地が縦横に走る、広大なスラム街が広がっていた。

そこに一歩足を踏み入れれば、人間が醸し出すあらゆる悪臭に満ちた世界だった。昼なお暗く、やせこけた男女が生気のない面持ちで、ぼんやりと軒下に坐っている。薄汚れた浴衣やシャツ、地下足袋姿の貧民街の男たちにくらべ、安物ではあってもきちんとした背広姿の小沼は明らかに異質で、男たちの警戒に満ちた眼差しが突き刺さってきた。

「あたいから離れるんじゃないよ」

金沢文子は、木串の尖端に丸まっている飴玉を舐めながら、唄うように言った。軽やかに路地を進んでいく文子の後ろ姿を眺めながら、小沼は、声をかける者こそいないが、貧民街の男女が文子には一目置いていることを感じていた。

やがて路地の突き当たり、低い塀に囲まれた小さな古寺に着いた。境内に入るなり、文子は本堂の階をのぼりながら、「お客さんだよ」と奥に向かって叫び、小沼に向かって、あがんな、というように手招きした。天井の低い板の間の奥に、粗末な祭壇が設けられ、塗りの剝げてところどころ漆喰が露わになった仏像が鎮座している。

「客だと？」

奥から、汚いどてらを羽織った、いがぐり頭の巨漢が現れた。

「はじめまして」

小沼は、板の間に両手をついて頭をさげた。

「ふうん、あんた右翼か」

差し出された名刺を一瞥して、安藤は言った。顔をあげると、笑みを浮かべているが、瞳に警戒心が浮かんでいる。

安藤浄海は、五十歳になる弁護士である。大正デモクラシーの時代から、社会主義者や労働組合を支援してきた。貧しい者の味方として賞賛される一方、奇行が目立ち、「名声がほしいだけの目立ちたがり屋」として毛嫌いする人も多い。数年前に「余生は貧民救済に捧げる」と言って出家し、貧民窟にある荒れ寺の住職になり、貧民窟の孤児を引き取って育てはじめ、そのことを本に著してちょっとした評判になっていた。

「憂国の士が、わしみたいな主義者に何の用かね」

「たとえ主義主張が違えども、私も安藤先生も、今の国家を何とかせねばならぬという点で一致していると思います」

身じろぎもせず、まっすぐ相手の顔を見つめて言う小沼に、安藤は笑みをおさめた。

「国家改造か……あんたも、北一輝の信者かね」

当時四十九歳の一輝こと北輝次郎は、国家主義者の大立て者で、軍人にも信奉者が多かったが、著書『日本改造法案大綱』で私有財産の制限や、主要産業の国有化を論じ、「隠れ社会主義者で

はないか」という噂も流れていた。
「北先生には、以前、お目にかかりました」
「ほう」
「ですが、残念ながら、行動をともにするに足る人物ではありません」
「なぜかね」
「彼は理論家で、実践家ではない」
「北一輝って、それこそリャクの親玉なんだろ？」
部屋の隅に座って飴玉をなめていた文子が口を挟んだ。北一輝は、腕自慢のあらくれ者を側に置き、労働争議に介入したり、資産家や企業を恐喝して大金を巻き上げるなど、荒っぽい所行から「魔王」と呼ばれていた。
「文子、おまえの大先輩だな」
からかうように言う安藤に、文子は頬をふくらませた。
「一緒にしないでよ。あたいはこの寺のみなしごを助けるためにやってるんだ。北ってやつは、そうやって稼いだ金で酒を呑んだり贅沢三昧してるって聞いたよ」
「そのとおりです」
小沼は、文子を見やって言った。
「国家改造を唱えながら、彼は何もしない。ただ、資本家階級に寄生しているだけの男です」
「それで……」
安藤は言った。

「あんたはわしに、なんの用事かね」
「今日は、ご挨拶に来ただけです」
「ふむ」
「今、社会主義者であれ、国家主義者であれ、社会改造を試みる者にいちばん欠けているのは、大衆動員です。犬養総理を暗殺して、社会は変わったか。何も変わりません。大衆が動かなかったからです」
「大衆は、犬養を暗殺した連中の助命を嘆願しておるじゃないか」
「大衆は、あの軍人たちに続いて決起するわけではありません。単に憂国の情に同情しただけです。私が大衆に求めるのは同情ではなく、ともに立ち上がってたたかうことです」
「まるで君は、革命家のような事を言うね」
安藤は笑った。小沼は笑わず、膝を進めた。
「そうです。大衆を動かすため、私は人民の海に身を投じて学びたい。今後、安藤先生のもとに通ってご高説を拝聴しつつ、貧しい民の心を学びたいのです」
言いつつ小沼は、持参した鞄を開いて茶封筒を取り出し、安藤の膝元に差し出した。これは、寄付させていただきます。貧民救済にお使いください。そう言って頭を下げた小沼を、笑みを浮かべて見つめつつ、安藤は茶封筒を拾い上げ、中身を確かめて目尻をさげた。
今日はこれにて失礼させていただきます。そう言う小沼に、安藤は「文子ちゃん、お送りしてあげなさい」と声をかけた。

寺を出て、昼なお薄暗い路地を、短いスカートから伸びる丈夫そうな両脚を動かして、金沢文子は歩いた。その背中を見つめながら、小沼は後に従った。

「ねえ、あんた」

路地を出て、貧民窟と繁華街を隔てる橋を渡って大通りに出たとき、不意に脚を止めて文子は振り向いた。

「ほんとうに、貧乏人が暴動を起こして、今の政府を倒せると考えてるのかい？」

声をひそめる文子に、小沼はうなずいた。文子は肩をすくめた。

「だったら、あの和尚のとこに通っても、無駄だよ」

「無駄？」

「あいつはね、社会を変えようなんて、これっぽちも思ってないよ。むしろ、あたいたち貧乏人がいてくれたほうが、都合がいいくらいに思ってるのさ」

「なぜ？」

「あいつ、ああ見えて結構もうけてるんだぜ。書いた本が売れるらしくてさ、演説会やラジオ放送に引っ張りだこ。たんまり謝礼をせしめてるらしい。そのくせ、あいつ、寺の雨漏りひとつ直さない」

口を尖らせて文子は続けた。よく見れば、広い秀でた額に、よく動く目差し。言葉遣いは荒っぽいが、なかなか賢そうな娘だと小沼は思った。

「そもそも、あの寺でみなしごたちを集めて育ててたのは、あたいなんだ。そこにあいつが入ってきて、まるで自分が孤児院を開いたみたいに言いふらしてる。いんちきな野郎だよ」

でもね……。文子は相好をくずし、くっくっと喉を鳴らして笑った。

「あいつのおかげで、あたいもリャクがやりやすくなってるのは確かだよ。ああいううるさ型の弁護士がついてるおかげで、素直に金を出すところが増えたからサ」

リャクを行っていたことを自ら認めたことに気づき、文子は肩をすくめて舌を出した。

「だから、もうここに来るのはよしな。時間の無駄だよ」

「いや、また来る」

小沼は言った。訝しげな顔の文子に、こう続けた。

「安藤さんをあてにする気は最初から、ない。ただ、貧民窟に住んで、貧民と同じものを食べ、同じ暮らしをし、そのなかで同志を募りたいと思うだけだ」

「本気かい？」

文子はあきれ顔でため息をついた。まあ、勝手にしな。そう言い捨てて、小沼に背を向けて橋を渡り、貧民窟の路地へと向かった。

翌日、再び貧民窟の寺に現れた小沼に、金沢文子はまたも呆れてため息をつき、安藤浄海は破顔大笑した。小沼は、前日の背広姿から、破れたズボンに地下足袋、シャツの上にぼろぼろの袢纏をひっかけ、首に手ぬぐいをまいた労働者姿だったからだ。

安藤は、出版社に行ってくると言って袈裟をまとい、文子に「面倒みてやりなさい」と言い残して出かけていった。文子は、「まさか来るとは思わなかったよ」と言いながら、子供たちを連れてリャクに出かけていった。

一人寺に残った小沼は、漆喰の剝げた仏像が鎮座する仏間に座ったまま、しばし空を見上げた。伊集院満枝の父・太吉が経営していた農場で小作人をしていた頃を思い出していた。太吉の援助を受けて中等学校にまで通いながら、そこで出会った左傾教師の影響で労働運動に飛び込んだ。太吉が亡くなったことを聞き、農場に戻ってきた小沼は、小作人たちの窮状を知り、彼らを組織して小作争議を起こした。結果は、伊集院家が雇ったやくざ者に暴行され、小作人たちはわずかな待遇改善で折り合った。

小沼にとっては挫折であったが、なぜか十五歳の伊集院満枝は、「あなたは、立派だったわ」と称えてくれた。以後、小沼は社会主義運動に身を投じ、今は国家主義運動に従事しているが、常に満枝のサポートを得ている。

つい数日前……。

小沼は、銀座のカフェで満枝と会った。いつものように多額の支援金を受け取った後、ふと小沼は漏らした。軍人には頼らない。もう一度、貧しい人々のなかに入り、彼らを組織したい、と。

そんな小沼に満枝は、「これをお読みになったら」と、薄い冊子を手渡した。五十枚ほどの藁半紙を閉じた冊子の表紙には、「湖南省農民運動視察報告」というタイトルが、ガリ版刷りで黒々と記され、その傍らに「一九二七年三月」と五年前の日付があった。満枝は説明した。支那の革命家が秘密出版した本よ。上海で手に入れた方がいて教えてくださったので、わたくしがお金を出して五十部ばかり印刷したの……。

アジトに帰った小沼は、さっそく冊子を開いた。裏表紙に「毛子任」とあるのは、この報告書をを書いた者の名だろうか。その名が、後に中華人民共和国国家主席となる毛沢東の筆名である

ことを、小沼が知る由もない。

それは、中国南部にある湖南省での農民運動の報告書だった。報告者たちは、そこで二百万の農民と、一千万人の市民の動員に成功した、とある。この数字はどこまで信用できるのだろうか……。首をひねりつつ読み進めると、その先には恐るべき光景が描かれていた。

農民たちは、四ヶ月にわたって暴動を起こした。地主や資産家の家を襲撃し、主立った者は銃殺した。死を免れた者も、三角帽子をかぶせられ、縄で縛られ、大勢の農民の罵声を浴びながら、町じゅうを引きずり回された。この制裁を加えられた者は、廃人同然になったという。制裁を受けなかった者は、いつ自分が同じ目にあうか不安にさいなまれる日々を送る。

……革命とは、客を饗応することでも、文章を書くことでも、絵を描くことでも、刺繍をすることでもない。左様な、上品で、優雅で、穏健で、慎ましいものではない。革命は暴動である。一つの階級が、他の階級を打倒する激烈な行動なのだ。

かつて、伊集院満枝に同じ冊子を送られた安西小百合が、その激烈な言葉に眩惑を覚えたように、小沼もまた、全身の血が入れ替わったような思いだった。

この「農民」や「大衆」は、まっとうな労働者や農業従事者ではあるまい。小沼はそう推測した。食い詰めた飢民や、都市の極貧層に違いない。かつて小沼が組織した争議の小作人たちは、それでも最低限の生活は保証されていた。だから、わずかな待遇改善に満足した。そんな望みすらない貧民を動員せねば、革命は成功しない……。

「ただいま」

境内で声がして、小沼は物思いから現実に引き戻された。少女たちを引き連れた金沢文子がリ

ヤクから帰ってきた。仏間にあがった文子は、小沼をしばし見つめていたが、やがて口を開いた。
「あれからずっと、ここに一人でいたの？」
小沼が寺に来たのは朝九時頃だったが、空を見上げれば、すでに日が高かった。何時間、夢想にふけっていたのだろう。
「そうだな……ずっと、ここにいた」
さよならと手を振り、戦利品をもってそれぞれの家に帰っていく少女たちを見送りながら、文子は言った。
「まさか、あたいを待っていたんじゃないだろうね」
小沼はしばし考え、それから顔をあげて文子を見て、たぶんそうだ、と答えた。文子は笑い出した。
「昼飯、まだだったら、おごってやるよ」
ついてきな、と言って文子は、仏間を出た。

連れて行かれた先は、貧民窟から小さな小川ひとつ隔てた町だった。崖に沿ってじめじめと湿気がひどく、えも言えぬ臭気が漂い、軒の低い小さな荒れ果てた平屋がぎっしりとひしめき合っている。
「ムンジャ、ヤアー！」
一軒の家から、胸のところで帯を結んだ見馴れぬ服の女が出てきて、文子を見るなり、笑顔で声をかけてきた。文子は、小沼には理解できぬ言葉で応え、しばらく会話をかわした。

「ここいらじゃ、あたいはムンジャって呼ばれてるのさ」
女が去った後、文子は小沼を振り返っていった。
「文子を、朝鮮語ではムンジャって言うんだよ」
ここは朝鮮人の部落なのか……。小沼はあたりを見回した。薄汚れた白い服、白い袴に、よれよれの黒い帽子をかぶった白髭の老人がゆっくりとした足取りで一軒の家から出てきて、玄関先で腰をおろして煙草を吹かし始めた。
「あのじいさん、元ヤンバンだよ」
「ヤンバン？」
文子は声を潜め、耳元で囁いた。
「両班（ヤンバン）というのは、朝鮮の偉い人。地主みたいなものかな。昔は豪勢に暮らしていたらしいけれど、日本からやってきた商人にだまされて土地を取り上げられ、食い詰めて、こんなところまで流れ着いてきたらしい」
それから、煙草を吹かす老人に目をやって言った。
「いま吸っているの、阿片（あへん）だからね」
「阿片？」
「しっ」
大声を出しそうになった小沼を、唇に指を当てて制し、文子は言った。
「朝鮮じゃ阿片がそこらじゅうで手に入るらしいよ」
「そうなのか……」

小沼はそっと老人を見た。黒く汚れ、皺だらけの顔に、陶酔が浮かび上がっていた。文子は続けた。

「阿片をはやらせたのは、総督府の方針だと信じている朝鮮人は多い。朝鮮人を阿片漬けにして、抵抗させないようにする日本人の陰謀だってね。だから……」

文子はにやりと笑った。

「あんた、日本人だとわかったら、殺されるよ」

思わず背後に目をやった小沼の肩をたたき、文子は哄笑して歩き出した。

「大丈夫、あたいは日本人だけど、ムンジャって呼ばれてる。仲間だと思われてるんだ。あたいと一緒なら、あんたも大丈夫だよ」

文子が向かった先は、小川のほとりの小さな河原だった。鶏の羽が散乱するなか、ランニングシャツにニッカポッカの青年が、さかんに煙を吹き出す七輪に鍋をおいて何か煮ていた。

「ジョンヨル！」

文子に声をかけられ、青年は振り向いた。その容貌に、小沼はたじろいだ。青年の右の額から顎にかけて、一筋の線が醜く走り、右の眼はうつろな洞のようだった。顎の真下の右の胸にも、深い傷跡が走っている。

「ちょうど、食べ頃だね」

平然と七輪に近寄り、鍋の蓋をあけて文子は満足げに呟いた。その背後からのぞくと、真っ赤な汁に得体の知れない肉塊のようなものが浮かんでいる。

文子が、ジョンヨルと呼ばれた青年に朝鮮語で何か言った。ジョンヨルはうなずくと、ひしゃくで鍋の中身をすくって、七輪の傍らに置いた丼に入れ、木の箸とともに小沼に差し出した。

「食べな」

にやにやして見つめる文子の視線を感じつつ、小沼は、おそるおそる、肉塊を箸でつまんで口に入れた。唐辛子らしい刺激の強いにおいを我慢して咀嚼した。筋ばった肉塊は妙な粘りけがあり、飲み込んだ後も、歯に脂のようなものが残った。

それ、なんだと思う？　首を傾げる小沼に、文子言った。

「あいつさっき打ち殺した、野良犬の肉だよ」

青年の足下に、剝いだばかりらしい薄茶色に黒斑の毛皮を見つけた。毛皮には、血まみれの犬の頭がついていた。

ようやくの思いで丼の中身を食べ終えたが、口のなかは唐辛子で焼けるように痛かった。文子が、ジョンヨルに何か言った。ジョンヨルは足下に置いてあった一升瓶を傾け、欠けた茶碗に液体を注ぎ、小沼に差し出した。

「朝鮮のどぶろくさ。飲んでみて」

白濁した液体に口をつけると、甘酸っぱい。ひりひりする口中をすすぐように飲み干した。マッコリ……。人ごこちついて顔をあげた小沼に、ジョンヨルはそう言って微笑んだ。見回すと、河原には数人の朝鮮人男女が集まり、金を払ってジョンヨルから犬のスープを受け取って食べている。

「あいつは、朴正烈といってね、元は京城でいいところのボンボンだったらしいんだよ」

自分も犬肉を食べながら、文子は説明した。
「さっきの阿片じいさんと同様、日本の商人に土地をだましとられて、家は貧乏になっちゃった。それでもがんばって勉強して、日本の学校に通った。ところが大地震の時に自警団に斬りつけられて、あんなひどい傷を顔に負った」
九年前の大正十二年、関東大震災で帝都が灰燼に帰したとき、未曽有の天災に、官も民も理性を失った。朝鮮人が火をつけ、井戸に毒を投げ込んでまわっている。そんな流言飛語を信じた人々は、日本刀や、どこからか出回った小銃などを手に自警団を結成し、数千の朝鮮人を血祭りにあげた。
「それ以来、あいつは何もかもやる気を失い、ついに落ちぶれて犬殺しをやってる。かわいそうだから、あいつと寝てあげたんだよ」
寝てあげた……。その言葉に、驚いた視線を向けてきた小沼を見やり、文子は言った。
「あたい、かわいそうな男を見ると、寝てあげたくなる性質なんだ。このあたりの朝鮮人の若い衆をずいぶん面倒みてやった。だから、あたいは日本人だけど、この町で歓迎されているのさ」
ごちそうさん。文子は笑顔で朴に声をかけて立ち上がり、「おいしかったよ」と言葉を添えて歩き出した。七輪の炭をいじくっていた朴は、顔の傷をひきつらせて笑い、手を挙げて見送った。
「あんた、貧民窟に住んで、貧民と同じものを食べ、同じ暮らしをし、仲間を集めたいって言ってたね」
狭い路地で、すれ違う朝鮮人たちと笑顔をかわしながら、文子は言った。
「あたいは、犬の肉も食べるし、ニンニクくさい朝鮮人の息も平気。大勢の朝鮮人と寝てあげた。だから仲間にしてくれてる」
ふと足をとめ、文子は小沼を見つめて言った。
「あんたに、それができるかい？」
瞬きもせずに見つめる文子の眼差しを静かに見返して、小沼は頷いた。

翌日、貧民窟の寺を訪れると、安藤は留守で、文子がひとり、小沼の訪れを待っていたかのように、仏間に膝を抱えて座っていた。
来たね。そう微笑む文子の面差しが、ひどく大人びて見えた。小沼は、背に負ったずた袋から「湖南省農民運動視察報告」を取り出し、文子に渡した。
なに、これ？　ページをめくりながら言った。支那のアカの話？
そうだ。小沼は答えた。
途中まで読んで、文子は顔をあげた。その頬が紅潮していた。
すさまじい話だね。ほんとうに、支那でこんな事が起こったの？
そうだ。
ふうん。
冊子に目を落とし、全部を読み終えて再び顔をあげたとき、文子の瞳はまっすぐに小沼の瞳に向けられた。かすかに潤みを帯びた瞳が揺れていた。
「あんた、ここに書いているのと同じ事を、日本でもやりたいってわけ？」
小沼は無言で頷いた。

「この貧民窟の連中と一緒に、威張ってる連中を、ここに書いてあるように、痛めつけるつもりかい？」
小沼は、そうだ、と小声で答え、できることなら、あの朝鮮部落の連中も一緒にだ。
「おもしろそうだね」
文子は冊子を床において、小沼のほうに膝を進めた。
「あたいもやってみたいな。威張ってる連中を並べてびんたを食わせてやるんだ」
そう言って俯き、肩を振るわせて笑いながら、文子は続けた。
「それから、きんたまを蹴り上げやるの」
自分の言葉に自分で笑い、文子は言った。
「なんで銀座のでかい店が、あたいみたいな小娘に脅されて、お金を出すか、知ってる？」
安藤さんがついているからじゃないのか？　そう問うと、それもあるけど、それだけじゃない、と文子は言った。
「最初は当然、門前払いばかりだった。あんまりあたいらを馬鹿にした奴がいたから、腹が立って、後を尾けた。でかい家に住んでた。玄関に入ろうとしたところを、後ろから駆け寄って、きんたま蹴り上げてやったんだ」
地面にうずくまったそいつを、何度も足蹴にし、「また馬鹿にしたら、きんたま潰すからな」と言い残して逃げた。その後、何人かを同じ目に合わせた。どう噂が広がったのか、やがて商店主や支配人たちは文子の名を聞くだけで、おとなしく金を出すようになったという。
まあ、潰すってのは、ただの脅しだけどね、と文子は言った。

「そこまでやるほど、あたいは残忍じゃないから。でも……」
文子は喉を鳴らして不敵に笑いながら言った。
「もし、特権階級であるというだけで、きんたまを蹴り潰さかねないと分かったら、怖くて怖くて、夜も眠れなくなるだろうね……」
ふと、小沼は数年前に聞いた、ある言葉を脳裏に蘇らせた。
……あたいたち労働者が団結して、悪い金持ちのきんたま蹴り潰してやンないと、世の中よくならナイってことです！
今はモスクワの極東労働者共産大学（クートヴェ）で学んでいるはずの、元女工の喜代美（きよみ）が、小沼の「隠れ家（アジト）」で開かれた勉強会で、そう発言してまわりを笑わせていた。
そうだ。世の中を変えるとは、権力者のきんたまを潰し、再起不能にした上で、新しい世界を築くことだ。むやみにたたかっても、強大な権力を打ち倒すのは容易ではない。敵の急所を見極め、効果的な攻撃を加えること。そのためには……。
「ねえ……」
文子の声に我に帰った。いつの間にか文子は、小沼の頬に息がかかるほど、にじり寄っていた。文子の右腕が伸び、小沼の首にからみついた。
「あんた、本当に、ここに書かれているような場面が見たくて、この寺に通ってきてるわけ？」
小沼は頷いた。
「あんたも、かわいそうな男だね」
文子の唇が、小沼の口を覆った。柔らかな文子の舌が、口腔に侵入し、激しくうごめくのを感

じながら、どこかで聞いた言葉だ……と小沼は思った。
小柄な文子の体が小沼に覆い被さり、小沼は、その重みを受け止めるように床に仰向けになった。息をあらげて小沼の顔や首を嘗め回しながら、文子はブラウスを脱ぎ捨てた。驚くほど豊かな乳房があらわになった。小沼は、その乳首にしゃぶりついた。柔らかな乳房に顔を埋める小沼の後頭部を愛撫しながら、文子は言った。
「勘違いしないで……あたいは、誰とでも寝る女だよ」
あたいは、誰のものでもない。当然、あんたの女にはならない。あたいはみんなのもの。かわいそうな男たちみんなのもの。それでいいなら……。
「いろいろ、面白いこと、やろうぜ」
乳房の谷間から顔をあげた小沼の視線の先に、優しく微笑む文子の顔があった。その微笑みに小沼は、胸の裡を覆っていた雲が霽れていくような思いを覚えていた。

事を終え、再びブラウスとスカートを身に着けた文子に、小沼は言った。あんたのことを聞いて、いいか？
「いいよ」
気軽に答える文子に、小沼は問うた。いつから、ここにいるんだ？
「三年前のことだけどさ……」
文子は身の上を語りだした。早くに父親をなくし、おでん屋の女給をしている母親と二人暮らしだったが、文子が十二歳のとき、母親が新しい男を引っ張り込んだ。酒癖の悪い人夫だった。

昼間から、文子に買い物を命じて外に出し、母親と情事にふけった。さらに、乳房がふくらみ始めた文子にも、いやらしい目差しを向けてくるようになった。母親がおでん屋に勤めにでている時、人夫は文子を押し倒した。文子は夢中で相手の股間を蹴り上げ、逃げた。逃げた先が、昨日、小沼を連れていった朝鮮人部落だった。
「そこであたいは、さっきの朴に拾われたのさ。朴はあたいに何も求めず、食わしてくれた。だからあたいは、お礼に朴と寝てあげたわけ」
一度覚えた男女の交わりは、文子の性に合った。大勢の朝鮮人と寝た。その一人から、リャクのやり方を教わった。自分で稼げるようになった文子は、橋一つ隔てたこの廃寺に上がり込み、みなしごたちの面倒を見るようになったのだ……。
三年前？　ふと小沼は気づいた。十二歳で家出したのが、三年前だというのか？
「そうだよ」
じゃあ、おまえの齢は……。
「うん」
文子は豊かに実った乳房を突き出すように胸を張り、乱れた髪を手櫛で梳きながら、こともなげに答えた。
「十五だよ」

V

ベビー・ブローニングは、正式にはＦＮポケット・モデルＭ１９０６と呼ばれる拳銃である。一九〇六年、ベルギーのファブリック・ナショナル（ＦＮ）社に雇われたアメリカ人銃器設計者ジョン・ブローニングが開発した。二五口径で、銃身の長さは五四ミリ。銃弾六発を込められる。

一発撃つごとに、銃身の上部のスライドを後ろに引き、発射時に銃身の内部に溜まった燃焼ガスの圧力を利用して、空薬莢（からやっきょう）を噴出させる。同時にグリップ部分の銃倉から新しい弾丸が銃身に送り込まれる仕組みだ。

畳の上に二挺、鈍い銀色の銃身を光らせるベビー・ブローニングが並べられ、四つの視線が注がれていた。

「一人一挺ずつ、お持ちください」

部屋の隅に座っていた、地味な背広姿の男が言った。拳銃に注がれていた四つの視線が、男に向けられた。男は傍らに置いたカバンから、紙袋を二つ取り出した。

「六十発入っています」

男は、二人の女――猪俣佐和子と海老沼千恵子の前に、銃弾の入った紙袋を置いた。ごとりと重く金属音が響いた。銃弾のようだった。思わず息を呑む二人の女たちに、男は抑えた声音（こわね）で言った。

「あと二日、ここに滞在する間に、使い方を覚えてください」

昼食がすんだら、玄関までおいでください。そう言い残して、男は部屋を出た。

「佐和子さま」

海老沼千恵子が、不安そうに膝を進め、佐和子に身を寄せた。その眼差しが、拳銃と銃弾入りの紙袋に、交互に注がれている。

「本当に、これを……？」

佐和子は無言で、拳銃を手にした。約二〇〇グラムと軽量で、背広のポケットに入るサイズなので、女性にも扱いやすそうだった。

波の音が、障子ごしに響いてきた。佐和子と千恵子が、早朝東京駅を汽車で出発し、熱海（あたみ）の高級旅館に着いたのは、正午前だった。部屋に通されると、二人分の昼食の膳が並べられていた。箸をつけようとすると、男が部屋に入ってきた。曽根（そね）という「党員」は、二人に拳銃と銃弾を渡した。昼食が終わったら、二人は人けのない場所に移動し、曽根から拳銃の使い方の指導を受ける手はずになっていたのだ。

佐和子が、戦闘的技術団の班長である手塚から呼び出され、京橋のビルヂングを訪ねたのは、二日前であった。明後日、あなたが一番信頼する部下を連れて、熱海に行ってください。なるべく着飾って、いいところの令嬢が避暑にやってきたかのように見せかけて。その旅館に、曽根という党員が待っていますから、指示に従ってください。

熱海で、何をするのですか？　そう訊ねると、武器の使い方を習ってもらいます、と手塚は声を潜めた。武器をどう使うかは、まだ言えません。だがいずれ、大きな仕事をやってもらうこと

になります。
武器を使った大きな仕事。そう言われて佐和子の胸は躍った。男を誑(たら)しこみ、美人局(つつもたせ)で大きな成果をあげてきた。それが認められ、より大きな仕事を任されるのだ……。
熱海行きの連れには、海老沼千恵子を選んだ。うぶで臆病な千恵子だったが、幾度か美人局をこなすうち、すっかり自信をつけていた。最近では、佐和子の助けなしでも、男を「料理」することができるようになった。股間を蹴り上げ、さんざん足蹴にしておいて、陰嚢を踏みつけ、潰す、と脅す口調さえ、どこか楽しげだった。
そんな千恵子だったが、本物の拳銃を見せられ、それを使って「仕事」をするのだと言われ、佐和子に勧誘(オルグ)された頃の気弱さな彼女に戻ってしまっていた。まずは、お昼にしましょう。佐和子はそう言って、拳銃と銃弾を自分たちのカバンにしまい、膳に向かったが、千恵子は食べ物が喉を通らないらしく、すぐに箸を置いてため息をついた。
無理もない……。佐和子自身、千恵子の手前、平静を装ってはいたが、こみあげてくる不安を押さえかね、腕を取った手の震えが、すまし汁の表面にさざ波を作っていた。
「ねえ、佐和子さま」
海老沼千恵子が、沈黙に耐えられないように、小さく叫んだ。
「私たち、これで……人を撃つんですか？」
佐和子は無言で頷いた。
「そんな……、佐和子さま、撃てるんですか？」
佐和子は声を押し殺し、怯える胸の裡から言葉を絞り出した。

「撃つわ」
千恵子の肩を抱き寄せ、その頬に自分の頬を押しつけ、佐和子は言った。
「できるはずよ……あたしたちなら」

（第六部・了）